中井蕉園著『騮碧嚢（りゅうへきのう)』の吉野行（上）

湯城吉信

はじめに

江戸時代の大阪の漢学塾懐徳堂関係者はしばしば旅行に出かけ、多数の紀行文を残している。特に、吉野へはしばしば訪れており、中井竹山著『芳山紀行並詩』(一七六三年)、中井蕉園著『騮碧嚢（りゅうへきのう)』(一七九五年)、三村崑山著『芳山遊草』(一八二二年）などの紀行文が残されている。本稿では、その中から、『騮碧嚢（りゅうへきのう)』を紹介し、その旅の様子と蕉園自身の性格、創作の特徴について明らかにしたい。

『騮碧嚢』という書名について

『騮碧嚢』は、懐徳堂の中井蕉園が、寛政七年（一七九五）春の吉野への花見旅行を題材に作った紀行文である。『騮嚢』には漢詩が、『碧嚢』には文章（漢文）が収められている。

蕉園の序文（注１）によると、青い袋と赤い袋が餞別として送られたので、道中、詩ができれば赤い袋に、文ができれば青い袋に入れた。吉野行についてはすでに父親の竹山が『芳山紀行並詩』を著しており、その立派な詩文は、色で言えば、純粋な赤、純粋な青と言うべきである。それに比べ、自分の作品は美しい赤、青になることができなかったので、『騮嚢』、『碧嚢』と名付けたという。ちなみに、手稿本の元外題を見ると「騮碧嚢」は最初「絳緑嚢」と書かれたことがわかる（「絳」も赤色)。蕉園が字の選定に気を遣っていたことがわかろう。

以上のように、『騮碧嚢』の制作は父の『芳山紀行並詩』を強く意識したものであり、その題名には謙遜の意が込められていた。

テキストについて

『騮碧嚢』は、大阪大学附属図書館懐徳堂文庫に所蔵されている手稿本の他、いくつか写本がある。各写本の注記や文字の校勘により、蕉園が手稿本以外に複本を作り知人に見せて写させていたことがわかる。写本は基本的に手稿本の推敲を反映しているが、そうでない箇所もあり、蕉園が作品を公開してからも手元にある手稿本で推敲を続けていたことが窺える。

中之島図書館本などの写本で注目すべきは、手稿本にはない「吊王子賦」「肝膈相炤賦」「祭村上義隆文」「祈晴文」「芳山賦」の五篇の文章が見えることである。これらは、手稿本の序文でも「雑篇八篇」とあり、その存在が示唆されているが、『碧嚢』には三篇しか見えない（『碧嚢』では貼り紙で「雑文三篇」と修正されている)。蕉園が推敲で削ったものが一般に出回った写本では残っていたことがわかろう。

また、中之島図書館本などの写本には、欄外に蕉園自身のものだと思われる注が見える。

これらは字句の出典を示す貴重な情報である。

以上のように、写本には手稿本にない貴重な情報がある。ただ、写本に免れがたい誤写も存在する。そこで、本稿では、手稿本を底本としつつ、文字の判読が困難な場合（ほとんどが推敲箇所）などに主として中之島図書館本を参照した。以下、各本の概略、特徴を記す。

・手稿本『騮碧嚢』（遺 2　71）

大阪大学附属図書館懐徳堂文庫蔵。二巻二冊。『騮嚢』は五七葉、『碧嚢』は一六葉。藍筆で点が付いている。朱筆や胡粉を使って訂正されている（胡粉箇所は見づらい）。詳しい書誌情報は、湯浅邦弘編『懐徳堂文庫の研究　共同研究報告書』（二〇〇三年）八三頁の解題を参照されたい。

・新田文庫本『騮嚢』『騮碧嚢』（E195,79CL0062）（『懐徳堂文庫の研究』一一六頁）

大阪大学附属図書館懐徳堂文庫新田文庫蔵。題が凝った字体（隷書）で書かれている（三木本も同じ）。雑著は中之島図書館本と同じくすべて揃っており、欄外注も同じようだ。手稿本とは別に懐徳堂で外の人に見せる清書本があったことがわかる。その他、懐徳堂文庫には、中川幸蔵氏寄贈『碧嚢』（104.029.001）（『懐徳堂センター報』二〇〇四、二四頁）もある。

・中之島図書館本『騮碧嚢』（233/116）（明治三八年一〇月一八日受入印（13021）あり）

手稿本にない情報がある。欄外に「一本作〜」とあり、複数本を参考に書写されたらしいことがわかるが、

①雑著に手稿本にない五篇の文章「吊王子賦」「肝膈相炤賦」「祭村上義隆文」「祈晴文」「芳山賦」（手稿本ではその存在が示唆される）が見える。

②欄外に見える注は自注らしい（全部ではないようだが）。

・三木家所蔵本『騮碧嚢』

奥付により、天保九年（一八三八）に、三木尚之が中井碩果から、竹山『芳山紀行並詩』とともに借りて書写したことがわかる。達筆で書写されており、保存状態もよい。訓点が付けられている点が特徴。ただし、誤写もある（「山口」→「山谷」、「枝」→「花」、「團（団）」→「圍（囲）」など）。

その他、

・国会図書館本『騮嚢』『碧嚢』（明遠館文庫四六、四七）（印記：松田本生、益堂蔵書）

・尊経閣文庫本『騮碧嚢』（『尊経閣文庫図書分類目録』四一〇頁）、『騮嚢』（大正三年写本、『尊経閣文庫図書分類目録』四一一頁）

もあるが、尊経閣文庫本は未見である。

日程について

『騮嚢』は詩を収録するが、詞書きに当たる部分が長く、その部分だけ取り出せば十分紀行文として成立する。日本の歌物語の影響なのであろうか。その詞書き部分から抽出される『騮碧嚢』の旅の日程は以下のようである。

寛政七年二月二十八日～三月六日（全九日）
二四日：計画
二八日：出発―平野郷―藤井寺―石川―太子村―春日宿（宿）
二九日：竹内峠―竹内村（孝女伊麻（いま）の碑）―御所宿―戸毛村（原文「塔華村」）―桧垣本（宿）
三月一日：六田（渡）―千本桜―午後南に向かう―藤尾坂―蔵王殿―勝手神社―村上義光墓―喜蔵院（宿）
二日：竹林寺―如意輪寺―吉水院―桜本寺―実城寺―喜蔵院（宿：二泊目）
三日：天皇橋―雨師堂―世尊寺―躑躅岡―安禅寺―西行庵（苔清水）―蜻蛉瀑に向かう―蜻蛉瀑―大滝―山を越えて北に向かい音無川へ―国巣―宮滝―妹背山南―上市宿（宿）
四日：岡―柳本（宿）
五日：伊勢詣客と遭遇―奈良―宿―春日神社―鶯山―東大寺―興福寺
六日：黒鴈峠―宿
七日：昼頃玉造着、暮れに大阪に。

ちなみに、中井竹山『芳山紀行並詩』の吉野行は、宝暦十三年三月四日から九日の六日間であった。また、中井履軒『日録』に記録される吉野行（紀行はなし）も安永八年（一七七九）三月八日から一三日の六日間、三村崑山『芳山遊草』の吉野行は文政五年（一八二二）二月二〇日から二七日の八日間である。いずれも『騮碧嚢』の旅と同じく奈良に寄っている。『騮碧嚢』の旅が比較的ゆっくりとしたペースであったことがわかるであろう。

関係資料について

なお、『騮碧嚢』の旅に関して特筆すべきは、関係資料が残されていることである。一つは蕉園著『遊芳自導』であり、もう一つは金崎蘭窓著『吉野日記』である。

『遊芳自導』（大阪大学懐徳堂文庫新田文庫蔵）は、蕉園が自分用に作ったガイドブック兼旅行記録であり、携帯に便利な小冊になっている（縦一〇・八cm×横二一・八cm、全三八 葉）（図１）。「家翁遊芳記提要」（竹山『芳山紀行並詩』の日程を記す）、「大和名所図絵提要」（抜き書き、訪れた地名には朱引あり）など出発前にガイド用に書いたものと、同行が十一人いたこと、泊まった宿屋名など旅の記録とが見える。宿屋の名前は以下のようである。

図１『遊芳自導』表紙

春日村　かどや
ひがい本　芦原や
　千本にては休
　　辻屋
よしの　喜蔵院
　院主式部卿　……
上市　　車屋
　　甚キタナシ
柳本　猿屋
奈良　いんばんや
くらがり峠　河内や左郎兵衛？

上市での宿・車屋が汚かったというのは、『騮碧嚢』本文にも見える。よほどひどかったのであろう。

金崎蘭窓著『吉野日記』（大阪府立中之島図書館蔵）は、『騮碧嚢』の吉野行に夫婦で同行した金崎元永夫妻の中、妻の蘭窓が和文で綴った紀行文（手稿本）である。蘭窓は漢詩まで創作しており、その才媛ぶりを窺うことができる。また、その内容は『騮碧嚢』の記述を補完する資料として貴重である。この『吉野日記』は『大阪府立図書館紀要』二二号（一九八六年）に翻刻がある（多治比郁夫他「翻刻　吉野紀行二種」―「吉野日記」「よし野の山づと」）。

同行者について

『遊芳自導』によれば、同行者は十一人であった。以下、主に「翻刻　吉野紀行二種―「吉野日記」「よし野の山づと」」の解説に基づいて、同行者の紹介をしたい。

中井蕉園は、懐徳堂学主中井竹山の子。文才があったが、結核で享和三年、三七歳で亡くなった。吉野行の時、二九歳であった。『騮碧嚢』に「子貞」「蘭窓」「子寵」「吉卿」「子発」と見える人物はそれぞれ以下のようである。

「子貞」：金崎元永（もとなが）。字子貞、号松宇。尼崎屋七右衛門と称した豪商で寛政二年版『浪華郷友録』にも名前が見える。金崎家は古くから懐徳堂と関係があった。この旅は、蕉園と子貞が企画し、以下の同行者が加わった。いずれも懐徳堂で学ぶ者たちであった（『吉野日記』による）。その中、吉卿と子発は急遽加わることになったという（『騮碧嚢』本文による）。

「蘭窓」：子貞の妻。詩文をよくする才女であった。上述のように、『吉野日記』を著している。

「子寵」：岡橋為光（ためみつ）。字子寵、号蔓谷。『浪華郷友録』安政四年版、寛政二年版に載せられた医家で、『騮碧嚢』によれば、子貞の舅。大和は何度も訪れていたようだが、いい加減な道案内をして、蕉園や蘭窓に皮肉られている。

「吉卿」：天野幸蔵と称する医家。『吉野日記』に言う「すけゆき」らしい。

「子発」：早野正巳（まさみ）。字子発、号反求、橘隧。懐徳堂に学んで儒者になった早野仰斎の子。当時一八歳の若さであった。初めての旅行だったようだ。

以上の同行者に、金崎家の嫁二人と下女一人、荷物持ちの下男二人が加わり、一行は十一名になった（『吉野日記』による）。『騮碧嚢』の記述を見ると、この下女下男も結構意見を言ったり、主人をからかったりしているのがわかる。

出発まで

周知のように、当時旅に出ることは容易ではなかった。蕉園も吉野に行くのに苦労したようだ。『騮嚢』は以下のように始まる。

> 予之於芳山也、済勝覧古之寄、不能忘于懐者、十有餘年矣。与人約、成期而敗焉者三、許人之請、臨期而辞焉者四、皆塵冗縻之也。乙卯之春、奮然自拉、語諸金崎子貞。子貞曰、「善哉、我亦有志矣。」遂矢必往*。
>
> 【校勘】〇往　手稿本は「盟」を胡粉で消す。中之島図書館本により補う。

蕉園は、十数年の間、吉野へ行きたいと思っていたが、人と約束していたのに行けなくなったことが三度、人から誘われたが直前に断ったことが四度あった。いずれも用事ができたためである。そこで乙卯（寛政七年）の春、金崎子貞に話をし、必ず行こうと誓いを立てた。その時の蕉園の作。

> 名花失遊幾歳、恋情応因君伸、江湖風塵易老、莫使春風笑人。

今回を逃すといつチャンスがあるかわかりませんよというのである。花見を約束してか

ら蕉園は心が落ち着かなかったようだ。『吉野日記』によれば、蕉園から子貞に「この頃は何も手に着かない」と便りがあったようだ。それに対する蘭窓の返し。

咲く花に　あくがれながら　ねぬる（ママ）夜は　しらぬやま路に　ゆめやまどへる

「吉野の夢を見ておられるのでしょうね」というのである。

吉野への花見の場合、いつ出発するかは頭を悩ませる大問題であった。現在のように、天気予報の花見前線で開花時期を知ることができなかったからである。『騮碧嚢』の旅でも、いつ出発するかについても様々な説があったことがわかる。

世称、距立春七十有五日、為芳之花候*。又称、六十有五日。或曰、「皆不得也。執中則可矣。」乃与子貞謀、以二十*五日為発期、従執中之説也。有一人、聞之曰、「花候唯寒燠焉依、豈有屑々定数乎哉。北郊某寺之樹、実与芳同種、以此徴彼、伐柯*之則也。」余深然之*、往而問之。

【校勘】〇候　「信」を見せ消ちして直す。〇二十　後に「有」を見せ消ちする。〇之　「其言」を見せ消ちして直す。

【注】〇伐柯　参考とするものは近くにある意。『詩経』豳風の「伐柯」の「伐柯伐柯、其則不遠」に基づく。また、「伐柯如何、匪斧不克、取妻如何、匪媒不得」（木は斧がないと伐れない、妻は媒がないと娶れない）という句に基づき、「伐柯人」で媒介という意味に用いられる。

吉野の桜は、立春から七十五日だと言う人、六十五日だと言う人、はたまたその間だと言う人もいた。蕉園は間の七十日の説に従ったのだが、「何日目の問題ではなく気温が問題だ。北の郊外のある寺の桜は吉野と同種なので参考になりますよ」と言われ、見に行かせている。ここに言う「北郊某寺之樹」とは、『遊芳自導』によれば「北野金比羅の東隣霊符の桜」であるが、北野金比羅については未詳である（『摂津名所図会』巻四にある金毘羅社か？あるいは、現十三附近の北野にあった神社（綱敷天神社あたり）か？）。

だが、さらに、「種類の問題ではない。山の桜は里の桜が萎み出してから咲き出すのだ」という人もいる。気持ちが定まらない蕉園は、以下のような詩を詠んでいる。

芳嶺遊期計百般、人言宜待市花闌、閑窓情急茵難暖*、幾捻園*枝仔細看。

【校勘】〇園　「庭」を見せ消ちして直す。

【注】〇暖　暖の異体字。

二十四日になって、庭の桜は満開になった。北の郊外の花の様子を聞くと、つぼみが五分の一ほど開きだしているという。「今だ」と出発の支度を始めた蕉園であるが、子貞から、「風邪を引いたので出発を遅らせてくれないか」と知らせがあった。蕉園はやきもきしつつも、「これがかえって幸いになるかも」と自分を慰めていたが、幸い子貞の風邪が治り、二十八日を出立の日と定めた。

出立に際し、蕉園は、多くの人から餞別の詩歌を贈られている。その中、懐徳堂の門人

で歌人でもあった加藤竹里の歌は以下のようである。

ことのはも やまとにはあらぬ もろこしの よしのになして はなのめづらし

漢詩を詠まれると桜も驚くだろうというのである。
また、父竹山の送別詩は以下のようである。

愛爾文辞敏捷才、往探名嶽万花開、老身将理曽遊記、定識霊光賦已裁。
【注】中井竹山著『奠陰集（詩集)』巻七（影印本三八九頁）に「送男曽弘遊芳山」として見える。手稿本では「名嶽」を「芳嶽」に直す。

「霊光賦」とは、後漢の蔡邕が王延寿の「霊光殿賦」を見て、そのすばらしさに驚き自分の作品を書くのを中断した故事を言う（『後漢書』文苑伝)。「私もかつて遊記を著したが、お前はもっとすばらしい詩を作るのだろうな」というのである。期待されることは蕉園にとって誇らしくもあったが、プレッシャでもあっただろう。以上の送別詩に対して、蕉園はお決まりの謙遜でもって返答している（注２)。
出発の前日、日が暮れてようやく旅支度が整ったが、昼間から降っていた雨はますます強くなる。蕉園は子貞の家に泊まり、送別の宴が終わってから、子貞に詩を贈っている。

幽討啟行在厥明、魂巡碧艷与紅栄、今宵宜*不須衾裯、春色嗾人眠叵成。
【校勘】〇宜　「当」を見せ消ちして直す。

陳子昂「綵樹歌」詩に「紅栄碧艷坐看歇」という句がある。この詩で、「碧艷」は青くて艶のある葉、「紅栄」は赤い花を言うのであろう。「出発はいよいよこの夜明けですね。気持ちはすでに吉野を巡っています。今夜は布団は不要でしょう。興奮して眠れないでしょうから」というのである。

二十八日―旅立ち

二十八日、雨は上がっていた。出発に際しての蕉園の詩。

子興視夜明星爛、連日雨声何処還、遊人労*意今奚若、唯在山花開否間。
【校勘】〇労　「悩」を見せ消ちする。

心配していた雨も上がった。後心配なのは花が咲いているかどうかだ、というのである。旅立ちに際して、蕉園は以下のような詩も詠んでいる。

海鶴群飛皎潔翰、声々相和向春巒、山人側耳応奇聴、中有鏘々一翠鸞。

翰は羽だが、羽毛で筆を造ったことから筆の意もある。「海鳥が春の山へ飛び立つ。山の

人は耳を欹てて聞けば、美しい歌声の鳳を見つけるだろう」というのである。蕉園自身を言うのであろうか。

江戸時代の旅では、見送りは出発を見届けるだけでなく、途中まで連れ添うことが多かった（注３）。『吉野日記』によれば、この旅では、天王寺の辺りの河堀口（こぼれぐち）まで見送りが来ている。「いっしょに行きましょう」という旅人たちに、「親の許しがないので」と断っている。見送りは、旅人のためのものであるとともに、見送る人にとっても小旅行としての意味があったのかもしれない。

近郊に立ち寄る

一行は、まず大阪近郊の藤井寺や道明寺、誉田の応神天皇陵、壺井、上ノ太子叡福寺に立ち寄った（藤井寺以外は『吉野日記』による）。早野子発らが初めての旅行で行ったことがなかったからである。上ノ太子で杯を酌み交わしたが、蕉園はすぐに酔って付き人に笑われ、それに対して詩でやり返している。『騮碧嚢』を見ると、蕉園が体力がなかったためにしばしば一行から後れを取り、人に笑われていることがわかる。だが、その度ごとに詩で応酬している。蕉園にとって、詩は才能を発揮する手段であるとともにストレスを発散する手段でもあったのだろう。相手が理解できないことで優越感に浸れることも大きかったようだ。

茶と酒と

左党、右党の別、酒量が合うかどうかは旅をする上で重要な要素であった。幸い、この一行は、酒は飲むが酒量は多くない人ばかりで、しばしば休んで少しずつ酒を嗜んだようだ。餞別に伊丹の山口氏から贈られた酒を持参したが、途中で買ったりもしている。荷物持ちも大変だったであろう。一行は茶も好み、平野郷では子寵が荷物点検をさせ、茶を沸かす土瓶がなかったので購入している。

開花情報

先に述べたように､出発後の一行の最大の関心事は桜の開花に会えるかどうかであった。出発してからも行き違う人にしきりに吉野の花についての情報を求めていたようだ。蕉園は次のように詠んでいる。

晴笻一線春風道、周訪芳山花老幼、半言猶早半言晩、或病先期或病後。

「『早すぎる』と言う人もおれば､『遅すぎる』と言う人もいた」というのである。
一日目、一行は春日村（竹内峠附近）に泊まった。ここで吉野から来た旅人に会い、開花の状況を初めて把握している。

宿春日駅、比室有客、五六成群、就而問焉、「奚自。」曰、「自芳山矣。」「花事何如。」

曰、「得第一坂而已。千株谷*之開、什廛三四*矣。」「我将以朔登、何如。」曰、「祇*千株*之候也。甚矣、子之善計也。」問之他室、如出一口。*喜甚、以語諸子、而題隣室之壁。

【校勘】〇千株谷　胡粉で見えにくい。「第二次」を直す。〇三四　「二三」を直す。〇祇　「適」を見せ消ちして直す。〇千株　胡粉で見えにくい。「第二次」を直す。〇喜甚　この前に「余」を見せ消ちする。

吉野は、下千本、中千本、上千本と分かれている。蕉園らは隣の部屋の客から、山裾に近い下千本は咲いていたが中千本より奥はこれからだという話を聞く。他の部屋の人からも同じ話を聞き、蕉園は以下のような詩を詠んだ。

芳嶽佳人択匹配、幾多遊客寸心違、請看翰墨妍姝者、孔雀屏間獲選帰。

「孔雀屏」については、中之島図書館本の欄外に「孔雀屏事見五代史」という注がある。『古今列女伝』巻一などに見える唐の高祖（李淵）の竇夫人にまつわる故事をいう。屏間に孔雀を描かせて、求婚者たちに二矢を射させた。数十人に射させて当たらず、最後に李淵が両眼を射抜いたので、李淵に嫁いだという話である。「見事に満開の日を当てたぞ」と得意になる蕉園の得意な様子が窺えるであろう。

二十九日―竹内街道を通って桧垣本（吉野川）へ

翌二十九日、蕉園らは駕籠を買って、竹内峠を越えている。竹内峠とは、現在の大阪府南河内郡太子町と奈良県葛城市の府県境にある峠である。ここで、一行は、孝女伊麻（いま）の碑を訪ねている（現葛城市南今市）。

伊麻の話は以下のようである。寛文十一年（一六七一）、病の父親に鰻を食べさせたかったが手に入れることはできなかった。途方に暮れていた晩、水瓶の中に鰻がはねている。それを食べさせると父親の病が治った（『近世畸人伝』巻一「大和伊麻子」、『西国三十三所名所図会』巻七「孝婦伊麻旧趾」など）。この話は、おそらく、母の好物の魚を求めて苦労していると、家のそばから泉が湧き出し鯉が踊り出てきたという中国の二十四孝（後漢の姜詩）の話の翻案であろう。

なお、貞享五年（一六八八）、松尾芭蕉が『笈の小文』の旅で伊麻を訪ねて面会したようだ。『笈の小文』本文には見えないが、門人惣七宛の芭蕉書簡に見える（注４）。芭蕉は四十五歳、伊麻は六十歳を越えていた。

この芭蕉の逸事を蕉園も記録している（手稿本では貼り紙）。蕉園の記録する話は以下のようである（注５）。

芭蕉は長年、吉野を訪れたいと思っており、何とか一両の金を貯めた。だが、竹内で伊麻のことを聞き、孝養を尽くしている姿を見て感動し、一両を置いて、吉野には行かずに帰った。「残念ですね」という友に、「花の美よりも人の美だ」と語ったという。

だが、実際は、芭蕉が伊麻を訪ねたのは吉野の花を見た後で、旅費を贈ったというのは事実ではない。（このような伝承が作られたのは、芭蕉に吉野の句がないからであろう。）

また、当時、伊麻は六十五歳、芭蕉は四十五歳である。蕉園は、芭蕉翁が親を世話する伊麻に会ったというが、伊麻の父親が生きていたかどうか不明である。
蕉園は、この芭蕉の話を一行に話し、以下のような詩を詠んでいる。

園々桃杏競妖紅、春色眩人幽趣空、閑杖翻求荒艸路、芭蕉葉上有清風。

人が綺麗な花園で艶やかな桃や杏の花に陶酔する中、私は雑草の生い茂った道を行く。すると芭蕉の葉の上を清風が通り過ぎていくのに出会うことができた、というのである。
御所（ごせ）で一行は駕籠を降りて歩く。だが、蕉園だけが遅れて、戸毛村（原文「塔華駅」）に着くと、先に着いて酒を飲んでいた一行から「ごゆっくりですね」と皮肉を言われた。それに対する蕉園の返し。

三三両両緑菲蹊、休笑失群行易瞬、想像名花心不在、烟霞況使履笻迷。

道の緑が綺麗で気を取られますし、吉野の花を思って心ここにあらずですし、まして山水には気を取られてしまいます、というのである。言い訳のオンパレードである。
蕉園は自分が遅れたにもかかわらず、食事が終わると付き人に出発を促している。付き人が文句を言った様子を見て、店の人が笑って「行楽でしょう、ゆっくりされたら」と言った。それに対する蕉園の返し。

勿*為愛花士*、春来心繁々*、東開与西謝、不得一日安*。
【校勘】〇勿　中之島図書館本は「莫」に作る。〇士　中之島図書館本は「客」に作る。〇繁々　中之島図書館本は「繁事」に作る。〇この詩の欄外に書き入れがあるが解読難（「繁東総且（？）、全句皆（？）平　五絶ニテ＊（？）ベキカ」）。

子寵はおせっかい（上述の土瓶の話参照）でおっちょこちょいなところがあったようだ。子寵はみなに「私は大和へは何度も行っているので道に詳しい。何でも聞いてくださいよ」と言い、「あそこがどこどこ」と案内していたが、地元の人に確かめると半分は違っていたという。吉野川を目前にした車坂でも、付き人が「子寵の案内のせいで遅れた」と言うので、蕉園は詩を詠んで、「山水は以前の山水のはずなのに、詩を吟じて骨抜きにされてしまったのでしょう」（注６）と皮肉っている。子寵はそれを聞いて、笑いながら「それなら、これから景色がよくなるにしたがってますますひどくなりそうですね。もう案内はやめておきましょう」と言ったという。
車坂を降りて、一行は馬から下りた。体力のない蕉園は体が疲れ切っていたが、会う人ごとに「いちばんいい時に来ましたね」と言われるのはうれしく、心だけがはやった。

労笻疲履下山垂、心益忙々脚益遅、牧豎樵翁迎解意、無人不告符花期。

一行は日暮れに吉野川右岸（北側）の桧垣本に着く。付き人は「もう少しがんばったら今日中に吉野に着きますよ」と言うが、蕉園は宿を求める。その時の言い訳の詩。

休怪求花急、山近俄命舎、深惜山趾花、昏暮行相捨。

今行くと暗くて山裾の桜が見えないだろうというである。この夜、一行は吉野川の水を汲んで茶を点てている。

三月一日―吉野着

三月一日、一行は桜を見たい気持ちがはやり、そろって早起きした。六田（むだ）の渡し（別名柳の渡し）を渡る時、吉野の桜を確認することができたようだ。蕉園は詠む。

楊柳渡頭晴十里、棹排春浪曙光分、自此花蹊不用問、請看峯角瞥然雲。

晴れ渡る天気の中、棹は輝く波を押し分けていく。ここからは道を尋ねる必要はない。ほらあそこに雲のような峰が見えるでしょう、というのである。この六田で、なおも蕉園は茶店の主人に開花の状況を確認し、安心して腰を落ち着けて酒を飲んでいる。

津頭排*艸坐芳茵、且擊渓鮮壺買春、吟行今日須徐緩、既是名山花裏人。
【校勘】〇排　中之島図書館本は「拂（払）」に作る。

この河畔で若草の生える中、川魚と酒を楽しむ。今日は急がなくていいでしょう。もう花の中に着いているのですから、というのである。

この後、一行は一の坂、下千本を目指す。子寵と蕉園は馬に乗り、他の人は歩いたようだ。馬のお陰で先に着いた蕉園は、満開の下千本を目にして以下のような詩を詠んでいる。

樹々淡紅千段霞、凹然幽谷凸然花、行人何者*無驚駭、未下賛辞先一嗟。
【校勘】〇者　行間に「得ニテハ」という推敲の跡がある。中之島図書館本は「得」に作る。
烟綴霞装十数里、粉腮紅頬五千春、東風深鎖黄金屋、移得呉王宮裏*人。〔割注：芳嶽古名*黄金峯*。〕
【校勘】〇名　「有」を見せ消ちして直す。〇峯　この下に「之名」を見せ消ちする。

一首目については説明不要であろう。窪んだ谷から沸き立つような花を前にすれば、誰も言葉より先に驚きの声を上げるというのである。

二首目は若干説明が必要であろう。「黄金峯」とは金峯山を言う。呉王宮裏は、かつての呉王の遊楽の地を歌った李白「蘇台覧古」詩の「曽照呉王宮裏人（曽て照らす　呉王宮裏の人）」に基づく。ここでは、後醍醐天皇の南朝のことを言う。十数里も続くこの霞む風景に五千年間続いた花。この美しい風景に東風が黄金の屋敷を閉じこめて、南朝の宮廷の方々をお迎えできたのである、ぐらいの意味であろう。

なお、桧垣本を出発する時、子発と吉卿は、「吉野と言えば、千本だ。吉野に着いたら、

まず千本を見て詩を詠もう」と約束し頑張って歩いていたようだ。だが、蕉園と子寵が馬を買ったために先に着き、詩も先に詠まれてしまった。「お先に詩を作りました」（注７）という蕉園に、「いくら私たちが健脚でも四つ足には敵いません。いくら詩を詠むのが速くても、鞍の上には敵いません」と返している（注８）。鞍の上とは、詩文を作るのは「馬上（乗り物の中）」「枕上（寝床）」「厠上（便所）」がいいという「三上」を踏まえる（欧陽脩「帰田録」に基づく）。

豊臣秀吉は、文禄三年（一五九四）の春、五千人の家来を連れて吉水院（現吉水神社）を花見の本陣として、五日間、吉野の花見の会を行った。蕉園らは、その跡を訪ねようと思ったがわからなかったようだ。そこで、崖にせり出した茶店で酒を飲み、蘭窓と詩の応酬を行っている。しばらくすると雨が降ってきた。蕉園は、我々のために化粧し直してくれているのであろうと詠んでいる（注９）。

一行はその後、如意道人に遭遇している。如意道人とは、もと伊勢山田の古道具屋で、書画を求めて全国を巡り歩いたという（注 10）。腰に大きな如意をおびていたのでこう呼ばれる。寛政七年には数えで五五歳だったと思われる。平賀白山『蕉斎筆記』には「文盲ものにて愚者なり。さればこそ無差別に無用の人迄尋ね、書画を求め、酒を好み、所々にて酔狂をし…」とあるが（府大本なし、内閣文庫要確認）、蕉園も同様のことを記している。

蕉園は、如意道人の様子を以下のように記している。ぼさぼさの髪の毛でみすぼらしい格好をし布袋を背負った男が茶店の外に立っていた。蕉園が筆墨を手にしているのに目を止めたのである。蕉園だと知ると、「以前、大阪でお家をお訪ねしたことがあるのに門前払いを食らいました。今日はこのような満開の吉野であなたにもお会いできて幸せです。ぜひ一筆お願いします」と所望してきた。蕉園が笑って答えないとさらにひつこく言ってくるので、蕉園は怒ったふりをして、「お前のような文盲で人におもねって名を売っている輩にはやらない」と言った。子貞が間を取り持って、弟子たちが詠んだ詩をやったが果たして文字を解さなかったという。蕉園は、以下のような皮肉を言っている。

如意道人向客誇、眠餐行止皆如意、勝境探春無一詩、笑殺風流不如意。

如意道人は、何事も（名のように）「意のままになる」と言うが、このような絶景を目にしても一首の詩も詠めない。風流だけは「意のままにならない」のだろう、というのである。人を軽蔑する点において蕉園は容赦ない。道人は、蕉園がしたためて店に残していった和歌をはがして持って行き、子発が返すよう言っても応じなかったという。蕉園は以下のように詠う。

春風花半枝、留待黄鸝拠、一鴉何無情、踏破清香去。

春風に花が半開き、鶯が来てくれるかと思ったのに、無常な鴉が香りを踏みにじっていった、というのである。道人も去り、雨も上がってから、一行は谷を下り、花の下に莚を敷き、酒を飲みながら、中国の聯珠韻に倣って連句（漢詩）を詠んだ。

午後、一行はまず南に向かい、日本花（七曲坂の上よりの景色）を眺めて、藤尾坂に行

った。ここは、文治元年（一一八五）の文治の変の時、源義経が逃亡する際、静御前と別れた場所である（『義経記』巻五「静吉野山に捨てらるる事」、「義経吉野山を落ち給ふ事」に見える）。蕉園は次のように詠う。

佳人無路共窮通、永訣情寒積雪中、今日山花一樹*白、猶留芳露哭春風。

美しい人たちが窮し、寒い雪の中、永久に別れることとなった。今、咲き誇る白い花には、なお露がたまり、春風に泣いているようだ。というのである。蕉園は次々に南朝ゆかりの場所を目にして感慨が高まった。そのような感慨もなくただ花見に浮かれている客たちを目にして以下のような詩を詠んでいる。

芳嶺穠花歳月移、春風吹送一栄衰、前朝餘恨腸将断、蝶酔蜂癡總不知。

歳月が過ぎ栄枯の跡は見る影もない。南朝の遺恨は腸をも断つほどであったのに、花に酔う蝶や蜂たちは知るよしもない。というのである。

次に訪れたのは金峯山寺蔵王殿である。元弘の変の時、護良親王はここを拠点に戦った。敵が迫った時、村上義光が「いっしょに死のう」という親王を説き伏せて逃がし、自らは親王の身代わりになって亡くなった。義光が高祖の故事によって親王を諫めたことは、『太平記』巻七「吉野城軍事」に見える。蕉園は護良親王を追悼する詩を詠んでいる（注 11）。

続いて訪れたのは勝手神社である。静御前が義経を別れて後、山僧に捕らえられて舞を踊った場所とされている（『義経記』巻五「静吉野山に捨てらるる事」）。残念なことに、本堂は二〇〇一年の不審火で焼失してしまった。蕉園は次のように詠う。

孤鸞折翼窘群鴉、翠袖飄歌暗涙加、祠畔春光今寂寞、愁紅怨白舞風花。

一羽の鳳が翼を折って鴉の群の中に窮し、涙を落としながら舞い歌う。春の社の傍らに今は紅白の花が恨めしげに風に舞う、というのである。

それから、蕉園らは忠臣村上義光の墓を訪ねようと人に問うが誰も知らない。ただ、ある男が「殊勝な方々ですね。私は存じていますよ」と言って案内してくれた。名は伊兵衛と言った（『遊芳自導』による）。公にまつわる話を悲しげに聞かせてくれながら上ったり下ったりして南院谷という辺りに来た。蕉園は詠う。

草没旧碑難覓、野人攬泣導之、可憐英士光烈、併照無知有知。

旧碑が草の中に埋もれ、山の民が涙を拭いながら案内する。憐れむべし、英雄の勲功は、知る人も知らない人も同様に照らす、というのである。

この墓参りの後、日が傾いたので宿屋を探した。「魚が食べられるので宿屋にしよう」という意見と「山菜がおいしいから宿坊がいいですよ」という意見に分かれたが、子貞が「以前、宿屋に泊まったが器も汚いし、魚も出なかった」というので、喜蔵院に泊まることになった。この喜蔵院は現在も宿坊を営んでいる。果たして、風雅で器も料理も結構で

あった。よほど気に入ったのであろう、蕉園は三首の漢詩を詠んでいる。

選択求投宿、山房日未曛、欄飛千仞霧、窓落一層雲、澗水笙琴響、籬花錦繍文、隣並雖皆好、視聴清超群。
坐久漸黄昏、庭花看不分、清風一池水、幽磬半峰雲。
隔紙焙新茗、移鐺浣嫩芹、僧厨時供酌、復継昼来醺。

一首目は日暮れ前の宿の美しい様子を、二首目は日暮れ時の様子を、三首目は茶や酒を楽しむ様子を詠んでおり、蕉園らが宿に入ってどのような時を過ごしたかを窺うことができる。

入浴後、門の辺りを散歩して、芸者を連れて騒いでいる客を見て皮肉る漢詩を詠んだ。

冶郎一隊携妓過、糸竹破壊山水音、禽鳥応無識人楽、人兮豈識酔翁心。

こいつらのどんちゃん騒ぎで、山水が台無しだ。鳥や獣は人の楽しみは知らないだろうが、こいつらにも我々が酒を飲む真意がわからないだろう、というのである。「酔翁心」は、欧陽修作「酔翁亭記」の「酔翁之意不在酒、在乎山水之間也（酔翁の意、酒に在らず、山水の間に在るなり）」に基づく。酒飲みの心は酒そのものにではなく、周りの美しい風景にあるの意である。

（二日以降の様子は続編に述べる。）

【注】

（１）原文は以下のようである（ただし、中之島図書館本にはない）。

乙卯之春、南遊于芳山、友人餞以騮碧二嚢。乃以自随、食飲行止、唯文詩是業、詩随盛諸騮嚢、文随盛諸碧嚢。嚢飽、殆不能括也。及帰、各次編之、遂以嚢名焉。曩者家君*有芳之遊、所触歓賞感慨、写之以文詩、皆其正格、譬諸色、猶紅花藍澱也。使観者染其肺腸矣。余也傚之、而文拙詩劣、且間之以腐諢、是以歓賞感慨、未足以染人于楽与哀也。猶欲赤而騮、欲青而碧。奇哉友人之餞也、業已品余之伎倆矣。

【校勘】〇君　「翁」を見せ消ちして直す。

（２）竹里に対する返歌

芳山自古以花彰、多少風人極奨揚、今日漫遊無異頌、聊将作賦答春光。

竹山に対する返歌

琴酒追君遊跡過、荒朝花樹入春開、悲歓*昔被雄毫掃*、狗賦何能得続裁。

【校勘】〇悲歓　「雄篇」を見せ消ちして直す。〇被雄毫掃　「拾悲歓盡」を見せ消ちして直す。

（３）例えば、京都から江戸への旅では、大津まで見送りに行くことが多かった（児玉幸多『中山道を歩く』（中公文庫、一九八八年）四一七頁参照）。

（４）惣七（猿雖）宛書簡（貞亨五年四月二十五日、芭蕉四十五歳）（今榮藏『芭蕉書簡大成』角川書店、二〇〇五年、九〇頁）

十二日、竹の内いまが茅舎に入る。うなぎ汲入たる水瓶もいまだ残りて、わらのむし

ろの上にて茶・酒もてなし、かの、布子うりたしと云けん万菊のきり物あたひは彼におくりて過る。おもしろきもおかしきもかりのたはぶれにこそあれ。実のかくれぬものを見ては、身の罪かぞへられて、万菊も暫落涙おさへかねられ候。

（5）原文は以下のようである。

芭蕉翁以俳詞鳴者也。遊住城津之間、将南遊芳、而家素貧罄、多方営辨、得金一両、至武*内、聞阿今之孝、就見于其廬、愉色婉容、侍養甚謹。翁感嘆弗措、而衣食敝陋、不忍見也。乃悉出其金以贈、阿今辞焉、強止之。既而反帰、遇友于途、友怪之、告以故、友曰、「丈人之慕乎芳、有年矣。苦辛得媒、而中道棄之、不亦惜乎。」翁笑曰、「我之慕乎芳、以花美也。今也幸、見人絶美、所獲多矣。」於是余偶記之、以語諸子、且曰、「俳詞技之陋者也、而若人有焉。今夫学堯舜之道、開口輒説孝弟、而従耳目之欲、忽略其行、其聞孝子義奴也。或誹笑癡之、或妬疾譖之者、不為不多矣。噫実何心也。若使斯翁見之、其必唾其面矣。」遂*以賛翁。

【校勘】〇武　「嶽」を見せ消ちして直す。〇遂　この後に「詩」を見せ消ちする。

（6）原文「吟哦応奪其魄、熟路奚為易迷、霞嶺前時霞嶺、烟畦旧日烟畦。」

『吉野日記』にも同様のやりとりが見え、以下の蘭窓の和歌が添えられている。

年ふりしすずの下道ふみたがへいかなる花にこころとめけん

（7）原文「満谷無花不発、双筆無詩不成、一隊遊春詩戦、与君先二子鳴。」

（8）原文「我曹建*歩、其如四蹄何。我曹捷吟、其如鞍上何。」

【校勘】〇建　中之島図書館本は「健」に作る。

（9）原文「飛楼曲檻倚春光、花際無端一雨滂、応是嘉*逢繍心客、更将洗沐易新粧。」

【校勘】〇嘉　「欣カ」と書き入れがある。中之島図書館本は「欣」に作る。

（10）如意道人については、吉澤忠「如意道人蒐集画帖について」（『国華』九七五号、一九七四年）参照。

（11）原文「孤城傾覆半豺狼、七箭紅波血甲裳、王子辛心有誰識、愁風鎮断烈夫腸。」